

## 和泉式部恋愛詩歌の特徴

韓国の女流詩人黄真伊との対比を通して

THE LOVE POETRY OF IZUMI SHIKIBU

A comparison with the Korean Poet Hwang Jin Ie

南 二 叔\*

Having left behind a body of work comprising some 1,500 poems, Izumi Shikibu is justly regarded both quantitatively and qualitatively as one of Japan's greatest poets. How does her oeuvre stand in comparison with Korean women writers of that period?

As is well known, the mid-Heian period during which Izumi was active was a golden age for female writers in Japan. From this period we have Murasaki Shikibu's *Genji Monogatari*, Sei Shonagon's *Makura no Soshi*, and Akazome Emon's *Eiga Monogatari*. By contrast, in neighboring Korea these years were unusually unproductive. Not a single *monogatari* or private poetry collection survives. The main reason for this may be that Korean writers still had no language of their own in which to express themselves. This is substantiated by the fact that the introduction of Hangeul characters in 1446 precipitated a rapid upsurge in literary production from the Korean

---

\*NAM Yisug ソウル教育大学・壇国大学校日本語日本文学科卒業。韓国外国語大学日本語科修士課程終了。実践女子大学国文学研究科博士課程終了。現在韓国群山大学校専任講師。和泉式部の和歌を研究テーマに、「和泉式部集」の一考察」「和泉式部和歌の先駆性について」「平安・中世における和泉式部説話の一考察」「和泉式部統集」の帥宮挽歌群の一考察」「和泉式部連作の一考察」などの論文がある。

Imperial Dynasty onwards.

Many of these poets were in fact *giseng* performers. The effects of male polygamy and discrimination against women were still marked during the Imperial Dynasty and women were not generally able to express themselves freely. *Giseng* performers, though low in status, were exempt from these restrictions and were thus able to give free reign to their self-expression. One such performer, Hwang Jin Ie, composed exquisitely phrased poems unrivaled by her male contemporaries using a *tanka* format called *shijo*.

I propose to consider the poetry of Hwang Jin Ie together with the love poetry of Izumi Shikibu. A comparison of two completely unrelated writers may seem pointless, not to mention the differences in their respective social climates. However, I believe that viewing the work of Izumi Shikibu in this way will enable us to reconsider her poetry with a fresh perspective, and also to illustrate the general content and structure of Japanese and Korean women writers of that period.

和泉式部は、千五百余首という数多くの歌と様々な伝本を残している点から量的にも質的にも日本の詩歌史上第一級の歌人と言えますが、このように名高い和泉式部の文学を韓国の女流文学史との対比観点から眺めたら、どのように評価できるのでしょうか。

周知のごとく、和泉式部が活動した平安中期は日本の女流文学が絢爛たる花を咲かせた時期であります。紫式部の『源氏物語』をはじめ、清少納言の『枕草子』、赤染衛門の『栄花物語』などが、すべてその時代の産物であることはいうまでもありません。それに対して一衣帯水の関係にある韓国を見ますと、同時代でありながら不思議なほど寂しい様相を呈しています。物語はもちろん私家集一つ残っていないのです。それで、本論に入る前にその理由について若干考えて見たいのです。

第一、日本は摂関政治が発達して安定していたのに、韓国の情勢は内憂外患で不安であったこと

第二、女性たちの感情や考えを自由に表現できる文字が韓国になかったこと

第三、日本の学問の継承が家を中心に行われる世襲制だったが、韓国は科挙（高級官吏採用のための国家試験）制度によるもので、学問の継承が一定しなかったこと

第四、日本は女流文学の生産母胎となる後宮サロンが発達していた（当時の権勢家である藤原家は自分の娘を後宮に入れて、文才ある女性を採用して娘の教育に励んでいた）のに、韓国はそうではなかったこと  
等が挙げられます。

この中で、自分たちの感情を自由に表現できる自国の文字を持たなかったという二番目の理由は致命的なものであったと思われまゝ。というのは、韓国の女流詩（時調）がハングルという文字が発明された1446年以後、朝鮮王朝時代から急激に出現し始めたことから逆裏付けられます。

ところが、このようにして朝鮮王朝時代に登場してきた詩人の多くは妓生（キセン）でありました。朝鮮時代は、普通の家庭の女性は儒教思想の影響で男尊女卑・女必従夫の悪習と情勢に貞節を強要する二重三重の拘束があったため、因習の奴隷になって自分の感情を率直に表すことができなかつたのです。しかし、妓生の場合、そのような拘束から完全に解放され、自分の感情を率直に表現することが出来たのです。しかも当時のエリート男性との交際によって最先端の文化を享受したり、彼らを通して様々な知識や教養を得たりすることにより、聡明な人は名詩人になったりもしています。黄真伊という詩人もそうした中の一人ですが、時調（3434 3444 3543）という短歌形式を用いて女性のこまやかな恋心の機微を、珠玉のような言葉で綴っています。

では、こうした黄真伊の時調を見るその延長線上に和泉式部の恋愛和歌をおいたらどうなるのでしょうか。それが今日わたくしが発表したいテーマであります。影響関係の全くない両者の詩歌を対比すること自体、歌の数の多少、社

会背景の相違点など考慮すべき問題があるので、やや無謀のように見えるかも知れませんが、しかし、このような方法を通してこそ広い視野から和泉式部和歌を捉え直すことができるし、それと同時に両国の女流文学作品の内部構造の同質性や異質性も浮き彫りにすることができると思います。

それでは、歌数の少ない韓国の黄真伊の詩に沿いながら、和泉式部の作品を対比させていく方法を取り、両者の作品について考えて見たいと思います。

## 1

まず、恋愛の心を素直に詠んだ歌を取り上げて見ますが、次の黄真伊の歌をご覧ください<sup>①</sup>。

冬至<sup>1</sup> 돌 지나긴 밤을 한 허리를 비껴내어  
春風<sup>2</sup> 니블 아레 서리서리 너헛다가  
어른님 오신 날 밤이여든 구뵈구뵈 퍼리라

<黄真伊>『珍本青丘永言287』

霜月のながながし夜を 真ん中より 二つに断ちて

あたたかき 春のしとねに 畳み入れ

君の訪ねくる短か夜をこそ 延ばし延ばさめ

歌の意味は、「霜月のながい、そのまま過ごすには惜しい夜を、真ん中から切り取って、大事にしまっておいて、恋しい人が来たときにくるくる延ばして使いましょう」という内容です。この詩人は時間さえ貯金してしまうのです。その目に見えない無形の時間を畳みに畳んで暖かい布団という空間の中にしまっておいて、ひらひら伸ばして使うという非常に斬新な発想を用い、恋心をイメージ化しております。つまり、彼女の純情の前では日常の時間の秩序なんか、問題にならないのです。個人としてこのような奇抜な着想を用いて素直に恋愛の喜びを詠んだ人は、韓国の詩の歴史から見て、彼女以前にはいないのです。和泉式部も歎きの多い平安の女歌の流れから見ると、珍しく恋愛の喜びに満ちた生命力の溢れる歌を詠んでいる詩人だと思われれます。

以下、和泉式部歌集は榊原本を定本にしますが、彼女の歌を見て下さい。

19 岩つつじ折りもてぞ見るせこが着し紅ぞめの衣に似たれば

この歌は、歌集には「春」という題詠になっていますが、夫に対しての思慕の情を「恋しい人が着ていた紅染めの衣の色にあまりにも似ているので、赤い岩つつじを手折ってじっと見つめている」と、岩つつじに託して詠んでいます。何を見ても恋しい人を思い出してしまう彼女の初々しい純情がよく現れています。和泉式部は当時の他の歌人のように自分の恋愛感情を恥じたり、隠したりせず、その喜びをはっきり表現する歌人だったのです。

次の歌、

82 見えもせむ見もせむ人を朝ごとにおきてはむかふ鏡ともがな

でも「大好きで大好きで、始終そばにいて私を見てほしいし、私も見ていたいあの人を朝起きたら向かい合う鏡にでもしたいものだ」と詠んでいます。相手に対しての激しい願望の気持ちが朝ごとに起きてはむかふ鏡ともがなによく現れています。次の歌からもその気持ちは顕著に伺われます。

83 田子の浦に寄せては寄する浪のごと立つやと人を見るよしもがな

(田子の浦に、今寄せたなと思う間もなく又打ち寄せてくる白波のように、立って行ってもまたすぐ私の所へ来てくれる人として、あの人を見る術でもあったらと思います)

84 よそにては恋しまさればみさごゐる磯による舟さしでだにせず

(もし離れ離れにでもなったら恋しくてたまらないと思いますから、あなたを外へ一寸も出さないのは勿論、私だって一歩も外に出ないで暮らしているのです)

91 君恋ふる心は千々にくだくれど一つも失せぬものにぞありける

(あなたを恋い慕う思いに耐え兼ねて、私の心は幾千にも割れ砕ける思いですが、そのかけら一つ分の愛情だってなくなったりはしませんわ。どんな苦しい思いをしてでも、あなたへの愛は薄れるものではありません)

95 山かげにみがくれ生ふる山草のやまずよ人を思ふ心は

(あの方のことが好きで好きで、何とかしてこんなにのぼせるのをやめようと思うのですけれどでもどうしてもやめられません)

以上挙げた歌には、19番の歌を除いては「恋」という題として詠まれています。何の憚りもなく、恋愛の世界がいかに甘美で華やかで新しい生命力を与えるものかというその喜びが高らかに誇らしげに表現されているのです。それも「つつじ・鏡・浪・みさごゐる磯」などの豊富な歌材を用いて重層的なイメージを喚起させています。

ところが、黄真伊が詠んだこの種の歌は一首しか残っていない(彼女の歌が散逸してしまった可能性もあります)のに対して、和泉式部が一夫多妻下の社会を生きた一般女性でありながら、恋愛の賛歌をこのように堂々と歌うことが出来たことは、正直言って私たち韓国人には理解出来ないことです。しかし、それは当時の平安の貴族たちの生活が朝鮮王朝の時代のように儒教の思想や仏教とかに支配されたのではなく、感情を優位にする情趣生活を大事にしたことを理解すれば簡単に解決できる問題だと思われまます。実際平安時代には天皇や上流階級の人々、僧侶さえ恋歌を詠んでいるのです。

## 2

次は、両者の歌の中で、男の行動を導く大胆さがよく現れている歌について考えてみます。

青山裏 碧溪水 |야 수이감을 자랑마라  
一到滄海하면 도라오기 어려오니  
明月이 滿公山하니 쉬여 간들 엇더리

〈黄真伊〉『珍本青丘永言286』

緑なす奥山の碧溪水よ、早く行くのを誇らざれ

ひとたび海に至れば 戻り来ることも難きを

名月 山に満ちている今宵に 休んで行ったらいかが

当時の社交の場で恋愛を主導していく方は、男性であり、女性はただ男性を

待たなければならない受動的な存在でありました。それは妓生の場合も同様でありましたが、黄真伊は果敢に男の行動を導き出しています。こうしたことは女は必ず男に従うという儒教の思想を理想としている当時の社会では、一般の女性なら考えることさえできないことでした。

この時調を詠んだ背景には次のような逸話が残っております<sup>②</sup>。王族の一人である「碧溪守」という謹厳な人は、当時の名士が既に有名になった黄真伊にうつつをぬかしているという話を聞いて、「たかが、一介の田舎の妓生に」と一笑に付していました。このことを伝え聞いた黄真伊は、いずれその傲慢な鼻をへし折ってやろうとチャンスを待っていました。ところが、ある時、用事ができた彼が彼女の住んでいた開城（韓国の中部地方の地名）に現れ、満月台を散歩していました。それを知った黄真伊は彼の後を追い、この歌を詠んだのです。青い山の中を流れる碧溪水よ（碧溪水は、溪谷の青い水という意味で、彼の号でもある）。早く流れゆくのを誇るな。一度海にたどり着くと再び戻ってくるのが難しいものだ。だから名月の光（名月は作者の号でもある）がこの山に満ちた今宵、休んでいったらどうだろう、と。さすがの彼も人生無情という思想の中に懸詞を巧妙に織り込んで誘う彼女の機知には屈服せざるを得なかったのです。

和泉式部の場合もこの種の歌はかなり詠んでおります。次の歌は長保五年（1003年）四月半ば頃、彼女の書いた『和泉式部日記』に最初に見える歌で、兄宮である為尊親王を失って悲しんでいる折り、弟宮である帥宮から橘の枝をもらった時返した歌です。

帥の宮、橘の枝を給はりたりし

227 薫る香をよそふるよりは ほととぎす聞かばや同じ声やしたると  
宮は橘の花を送って暗示的に彼女に対しての関心を示しているのに対して、彼女の方は「ほととぎす」に宮を譬え、橘の香りに亡くなった人を空しく忍ぶよりは、直接お目にかかりまして、亡き宮の兄弟であるあなたの声が故宮様と同じかどうか、伺ってみたいものですと、かなり率直に宮の愛情を求めています。

大変大胆な応じ方ですが、当時の女性としては極めて破格的な行動だと思われます。

次の歌、

432 白波のよるにはなびくなびきものなびかじと思ふ我ならなくにもその大胆さは同様に現れています。「やむごとなきをとこに」という詞書が示すようにこの歌はある身分の高い殿方に送った歌であります。「白波が打ち寄せると、ゆらゆらと揺れながらなびく藻のように、私はなびくまいなんてかたくなに思わないけど」と積極的に彼への好奇心を表明しています。また、他にもありますが、参考として歌と通釈だけを取り上げておきます。

418 我さらば進みて行かむ君はただ法の心をひろむばかりぞ

(お出で下さらないとおっしゃるのなら、それではわたしの方から進んでいきましょう。宮様はただ仏の道をお広めになつたらいいのです。)

今はたえてあはじ、などいひてのちも、またいきあひて

続388 しのぶれどしのびあまりぬいまはただかかりけりてふなをぞたつべき

(今までこらえにこらえてきたのですけれど、もうこれ以上こらえられません。こうなつたらもう仕方がないから、私たち二人はこうした仲だと世間に知らせてしましましょう。)

以上見たように、彼女は好きな相手に対しての関心をためらわず大胆に示し、忘れたくない人には、その愛欲に駆り立てる自分の気持ちを素直に表現して恋愛関係を主導して行きます。それは、彼女と帥宮との恋愛の発端から成立までを書いたと見られる『和泉式部日記』だけを見ても明らかです。和泉式部は70首、宮は68首(連歌は除く)で男性より多くの歌を詠んで送っており、彼女からの贈歌も14回も行われています<sup>③</sup>。

このような和泉式部の積極性は当時としては異常なものだったのでしょう。それは『源氏物語』の作者である紫式部がこのような彼女の行動を意識して



「和泉はけしからぬ方こそあれ」と非難しているし、また当代の権力者である藤原道長もこのような彼女を「うかれめ」と評しています。

当時の一般の貴族の女性だったら彼女の書いた『源氏物語』の一節、

ほどほどにつけて宿世などいふなることは知りたきわざなめればよろづ  
にうしろめたくなん。すべてあしくもよくもさるべき人の心にゆるしきお  
きたるままにて世の中をすぐすは、宿世宿世にて後の夜に衰へあるときも  
みづからのあやまちにはならず

のごとく、「しかるべき人の指図に従って無難に生きて行くのが後で過ちもお  
こらない」賢い生き方をしたのでしょう。しかし、同時代にありながら和泉式  
部はそれまでの男性主導の恋愛の規矩を破り、必要な場合は自分の思う通りに  
男性をリードしていきます。

そればかりでなく、好ましくないタイプの人には

686 我も我心も知らぬものなればいかがついにはなるとこそみめ

(私だってそうよ自分の気持ちが自分でも分からずに浮気をしてしまうで  
すもの、私たちのような仲がどのように落ち着くかこのまま続けて見まし  
ょう)

690 津の国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葦

(さあ、いらっしゃい。私のところへとあなたを招きするしなければなら  
ないのですが、私の方はどうもその暇が見当たりません)

と、きっぱりと詰ったり、拒む姿勢を見せることもためらわなかったのです。

そういう意味で、彼女は恋愛らしい恋愛をしたのではないかと思うのです。  
平安文学には様々な男女の恋愛関係が見られますが、その中で相思相愛を志し、  
また実際にそれをやりとげたのは和泉式部以外には見当たりません。そういう  
意味では日本の最も早い時期のフェミニストと言えるのではないのでしょうか。

### 3

それでは、次に男の変わりやすさと女の待つ辛さを主題にしている両者の歌

について考えて見ましょう。

靑山은 내 뜻이오 綠水는 님의 情이  
綠水 흘러간들 靑山이야 變홀손가  
綠水도 靑山을 못니져 우러 예어 가노고

<黄眞伊> 『大東風雅129』

靑山こそ変わらぬわが心 綠水こそ移りやすき君の情

綠水は流れ行くが 靑山はそのはずもない

されど綠水も靑山をば 忘れかね 泣きつつ行くか

ここで、作者は私と恋人（ニム）との関係を山と水の対立する属性を借りて、私に対しての君の心がたとえ流れる水のように変わっても君に対しての我が心は靑山のごとく変わらぬもので、自分が愛している人はあなた一人だけであると詠んでいます。ところが、此喩の面に注目してみると、大変面白いことを内包しています。現在も韓国では「山のような男」という言葉が用いられていますが、普通山の支配的なイメージは男の不動性と頼もしさを、水の変化と流動は女性の柔らかさを連想させるものだと思います。しかし、黄眞伊は山と水に対しての認識を逆に利用して、愛する人に対しての作者の態度を積極的に表現しております。韓国の歌の場合、詠歌の背景を説明してくれる日本の詞書のようなものはありませんから、どんなことがきっかけでこのような歌を詠むようになったのか分かりませんが、この歌は、自分の尊敬する師でもあり儒学者徐敬徳に対しての純情を表しているという一説があります。黄眞伊が妓生であるにもかかわらず、このような純情の歌を残しているのは当時著名な儒学者だった徐敬徳との交流が盛んだったからではないかと思われます。

次の歌も続けて読んで見ましょう。

내 언제 無信히여 님을 언제 소곶관디  
月沈三更에 온 쓰시 전혀업디  
秋風에 지는 님 소리야 낸들 어이 히리오

<黄眞伊> 『珍本靑丘永言288』

いつの日 われにまことなく 君をたばかりし

月のなき闇のよわ（夜半） 君の来るきざしだになく

秋風にそよぐ葉擦れに 狂わしきわが心

最初の句からかなり挑発的な言葉を用いて、「私が一体いつ信義なく、あなたを裏切ったとでもいうのでしょうか。秋の寂しい夜長にいまかいまかと待ち侘びているのに、あなたは来る気配がまったくない」と詠んでいます。女必従夫（女が必ず男性に従わなければならない）の時代を生きている女性だとは思えないほどの激しさです。特に初章では男性の無心とうそに関連した悩みを吐露していますが、それは妓生という身分から来る一種の劣等意識の現れだったかも知れません。何か相手の男性の誤解があったのでしょうか。しかし現実には自分の感情と何の関係もなく動いていきます。中の句と末の句には、秋風に落ちる落葉の音さえ、恋しい人の足音ではないかと末梢神経まで動員して男性を待っている作者の孤独な心境がよく現れています。

和泉式部の歌集を見ると、「今宵今宵とたのめて人の来ぬに（207）」、「人の久しう音せぬに（210）」、「心変わりたる男の～（211）」、「～よそになる男～（617）」、「頼めて見えぬ人に翌朝（625）」になってゆく男たちが登場しています。

207 今宵さへあらばかくこそ思ほえめ今日暮れぬまの命ともがな

この歌は「今宵今宵とたのめて来ない人に、翌朝」送った歌ですが、「今宵また生きていたら又こんなつらい思いをするに決まっていますもの、だから今日の日がくれない内に死んでしまいたいわ」と、詠んでいます。オーバーな表現を使うことはよくある技巧の一つですが、来てほしいという訴えの声はかなり強いです。次の歌は「今は外にと聞く人の許に、夕暮にいひやる」という詞書を持った歌です。

812 夕暮は人の上さえ歎かれぬ待たれし頃に思ひ合わせて

詞書の「人」が、相手の男性を指すか男性が通っている女性を指すか、はっきりしていませんが、前者を取る場合、「私があなたを待った頃のことを思い合わせると、彼女も今頃はまた忘れられているのではないか、気になって仕方な

いのだ」と、相手の不実を痛烈に批評する内容になります。このように一人寂しく待つ宵はかなり多かったようですが、代表的な歌をいくつか、取り上げてみることにしましょう。

77 せこが来てふししかたはらさむきよは我手枕を我ぞしてぬる  
347 世の中に苦しきことは来ぬ人をさりとともまつにぞ有りける  
560 葉てふあふひも過ぎぬ今はただ恋忘れぐさ独りともがな  
598 花見ても日をば暮らしつ青柳のいとくるしきはよるにぞありける  
608 寝られねば月を見るだにあるものを身にもしみつる夜半の風かな  
609 さ夜中に月を見つともたが里に行きとまりても眺むらむとは  
続238 おきながらあかしつるかなともねせぬかものうはげのしもならなく  
に

続239 我が宿をかへやしてまし人のまつ人はまことにすぎて行くなり

今日の私達の感覚では、これらを詠むとあまりにも男性に執着し過ぎているように感じられるかもしれません。しかし、平安王朝時代は560番の歌に見られるように葉という「あふひ」までさだめて、男性との逢瀬を願っていることを見ると、当時の女性にとって自分が思っている男性と会うのは、ごく稀だったように思われます。自分から行動することのできなかつた彼女たちは中空しか見えない家の中で男を待つしか方法がなかつたのです。前述した歌でも分かるように和泉式部は自由奔放で、また意識は他の女性よりかなり進歩的で積極的であったと思いますが、そんな彼女も一夫多妻制、妻問い婚という社会構造的な矛盾の前では、自らを歎くか、歌で強く訴えるかの方法しなかつたと思います。

#### 4

次の黄真伊の歌には悔恨の情がよく現れていますが、まずこれを詠んで和泉式部の歌を考えて見ましょう。

어더 닉 일이여 그릴 줄을 모로던가  
이시라 히더면 가라마는 제 구티야  
보닉고 그리는 情은 나도 몰라 히노라

＜黄眞伊＞『瓶窩歌曲集25』

あわれ わがせしことの おろかさよ  
さらにいませと袖引けば 君も行かざりしを  
送り出して焦がれる この心 われも知らざりし

彼女の気位の高い個性がよく現れている歌ですが、「一言引き留めておけば帰るはずがなかったのに、自分から進んであえて帰しておいてこんなに苦しむとは」と詠んでいます。それほど恋いこがれた人なのに引き留めもせず、帰してしまったという恋慕と悔恨の情が至極です。戸惑ってこのような行動を取ることは現代の人々にもよく見られる心象ですが、倒置法を用いた簡単な語句の中に、自分の感情と理性の衝突による内面の葛藤をよく捕らえています。前述した男性の行動を積極的に導いた黄眞伊像とはかなり異なるもので妓生の歌とは全く思われぬ風格を有しています。普通妓生というと、酒の席での接客や売春をする者と思われるかも知れませんが、必ずしもそうではないのです。当時において妓生は三階級に分けられていましたが、第一級の妓生は歌舞を習得し、上流階級の各種の宴会などに参加したりする官妓の伝統を受け継いで活動し、客を自分の家でもてなす余裕を持っていました。黄眞伊がどちらに属したか、いまだにそれを証明する文献はありませんが、このような恋愛歌が詠めたということは、この階級に属したからではないかと思われまます。

ところで、和泉式部の歌にはこれに比較できる悔恨の情を詠んだ歌はあまり見かけられません。彼女の歌には後悔したり残念がったりするよりは、相手の人に明確で断定的に自分の気持ちを伝えます。うらみつらみの感情の起伏の中に深まって行く帥宮との関係を詠んでいる次の歌を見ましょう。

405 うらむらむ心はたゆな限りなく頼む世を憂く我もうたかふ<sup>④</sup>

この歌は、帥宮の「うたがはじなほうらみじと思ふとも心に心かなわざりけ

り」に対しての返歌ですが、「私を恨む心は絶やささないでください。私も頼みにしているあなたをいつも疑っているのです」と答えています。恨みは無関心を意味しない、むしろ心にかけて愛しているからこそだと相手を論じていることでしょう。次の歌も見ましょう。

410 君は君我は我とも隔てねば心心にあらむものかは

この歌も「我ひとり思ふ思ひはかひもなしおなじ心に君もあらなん」と相愛を求める帥宮の贈歌に対しての返歌ですが、「私は初めから、宮様と同じく私は私あなたはあなたと別々の心でいたことなどありません」と強い表現を取っています。打てば響く彼女の才気がよく表れている贈答歌を並べて見ましたが、相思相愛を求める相手の期待に賢くも呼吸を合わせていきます。これらの歌はやはり非凡な知力を持っていなければ出来ないことだと思います。そういう面で和泉式部は感性ばかりでなく知性も兼ね備えた立派な詩人だったと思いますが、次の歌からもそれはよく伺われます。

549 忘れなむそれは怨みず思ふらむ恋うらむとだに思いおこせば

(あなたが私を捨てても、私は恨みにはおもいません。ただ私のことを思っているだろう、恋い慕っているだろうとだけでももし思いやってくさるなら) このような歌からは傲慢とか、ためらいとかみい出すことはできないのです。

873 あふことはとまれかうまれなげかじをうらみたえせぬなとなりなば

(あなたとの逢瀬がこのまま絶えるとしても、嘆きはしないつもりですが、もしもこのまま恨みの絶えない仲となってしまうたらそれこそ嘆かずにおられません)

## 5

もう一首、黄真伊には人生無常を詠んだ歌があります。彼女の精神的な支柱(師)でもあり、心の恋人でもあった徐敬徳の師を悼んで詠んだ歌だと言われていますが、次の歌です。

山은 옛 山이로되 물은 옛물 안이로다  
晝夜에 흘은이 옛 물이 이실쏟아  
人傑도 물과 古도다 가고 안이 오노미라

＜黄眞伊＞『校注海東歌謡135』

山は昔に変わらねど 水は日々に新たなり  
昼夜に流れる その水に 昔のもののあるべきや  
すぐれし人も水かは ひとたび行けば帰らざり

自然を凝視している詩人は哲学者にもなりうるものか、彼女は自然の営みに人間の営みを重ねさせております。前の部分で取り上げた歌でも山と水の、変わる・変わらない属性を用いた詩を詠んでいましたが、ここでも昔のままにいる自分を山に比喻して、自分をおいて去ってしまった優れた人を流れる水に比喻しております。この詩からは身近な死を嘆いているような絶叫ではなくて、ずいぶん観照的に人の死を眺めているような感じがしますが、和泉式部の挽歌はいかがでしょう。最愛の人である帥宮を失った際の挽歌を読んでみましょう。

次の歌、

続51 捨てはてむべき思うさへこそ悲しけれ君に馴れにし我が身と思へばは、「やはり尼にでもなってしまうおかしらと決心するにつけても」の意味を持つ詞書が添えてあります。歌では「俗世を捨てて尼になってしまうかと思うが、それもまた悲しい。なぜかという、亡き宮が愛して下さったこの体が唯一の形見だと思うからである」と帥宮にどれほど深く馴染んで来たかを詠んでいます。若死にした宮様のことがなかなか心から離れなかったでしょうが、その心境を「君に馴れにし我が身」という斬新な着想で表現している点がこの詩の見所だと思います。

次の歌

続52 思ひきやありて忘れぬ己が身を君がかたみになさむものとはでも、「一人残って、宮様を忘れずにいるこの身を帥宮のこの世に残した形見にするとは」と詠んでいます。次の歌からも、彼女の宮様を亡くした打撃がど

れほど大きかったかをよく読み取ることができます。

続53 今はただそよその事と思ひ出でて忘るばかりの憂きふしもなし

(今となってはあああのごことが宮様のなさったひどいことだと思ひ出して、宮様を忘れるよすがとするだけのいやなことも心に浮かんでできません)

続41 亡きひとの来る夜と聞けど君もなしわが住む里や魂なきの里

(今夜は亡き人の訪れてくる夜と聞いていますが、宮様はいらっしゃらない。私の住む所は一体「魂無きの里」なのでしょうか)

続54 語らひし声ぞ悲しき面影はありしそながらものも言わねば

(亡き宮様の面影は生前と同様に今も目に浮かびますが、何もおっしゃってくださいませんもの。あのとき、ともに語り合った声がただただ悲しくてなりません)

この種の歌は修辞を全く用いない直情的な詠み方をしていますが、和泉式部は感情が噴出する時、この方法を用います。それでも故宮に対しての悲しみがどれほどのものか、測ることができますが、その挽歌は厩大な数に及んでいます。論議になっている定数歌50首を除いても72首を数えます。歌数が多いだけでなく、彼女の挽歌は宮を亡くした悲しみの実感がどういふものかを宮に対してのはっきりしたイメージとともに表現しております。それに比べて黄真伊の挽歌がかなり観照的になっているのは、和泉式部が若くして宮と死別したことに対して、黄真伊はかなり年をとって、彼の死に会ったからではないかと思うのです。

## 6

また、和泉式部歌の大きな特徴として取り上げられることは、恋愛する自分の内面心理を凝視して詠んでいることではないかと思えます。榊原本の『和泉式部集』には収められていませんが、『後拾遺集』の雑六に収められているあの有名な歌がその代表的な歌であります。

1164 ものおもへば沢の蛍も我が身からあくがれ出づる魂かとぞ見る



詞書を参考にして見ると、「男に顧みられなくなった時、貴船神社に参詣して御手洗川に蛍が飛んでいるのを見て」詠んだようです。作者が見つめているのは、ほかではなく「もの思う心」だと思います。それで「そのようにもの思いに沈んでいる時は、川の上を飛んでいるあの青白い蛍の光さえも私の体から抜け出した自分の魂のように感ぜられる」と詠んでいますが、恋するものが物思いに沈む時、魂は肉体を離れてさまようという認識は当時の他の作品からも見られます<sup>⑤</sup>。だが、特に和泉式部が秀れていると思われる点は、青白いはかなげな蛍の光を物思いの魂のイメージとして捕らえたからでしょう。

それ以外の歌も少し取り上げて見ましょう。

次の歌、

ひさしうあらずやあらむとおもふ人の、ものいひそめてたえてあ  
はぬに

続12 つらかむ後の心をおもはずはあるにまかせてあるべきものを  
は詞書を参考してみると、「付き合っただけで、どうせ長続きはしないのではないかと思ひ、決して契りを結ばずにいた頃」詠んだのですが、その内容は「契りを結んだら、後で私がどんなにつらい思いをするかよく分かっているのよ。これを考えさえしなければ、このまま成り行きに任せてもいいのですけれど」と独白しているのです。様々な男性との付き合いによって、恋が有している属性を知り尽くした私だもの、もうこれ以上恋なんかしませんという気持ちでしょう。最初は純情で人を懐かしんだり頼みにしたのですけれど、男性の心の変化しやすさと頼み難さを分かってからは恋には慎重にならざるを得なかったでしょう。

こうした憂きことが続く中で自分の心理がどのように変化していくのか、それがうまく表現されていることが分ります。

558 身の憂きも人のつらきも知りぬるをこはたがたれをこふるなるらむ

(自分の辛い運命も、人の冷たさも十分に知っているのにそれでもまた誰が誰を恋慕しているというのですか。)

648 なかなかに憂かりしままにやみにせば忘るるほどになりもしなまし

(あの時お便りをくださらないまま二人の中が絶えてしまっていたならば、今頃はようようあなたのことを忘れる時分になっていたのかもしれませんがのに)

いとかくつらきをも知らでなむ頼むといふ人に

678 心をばならはしものぞあるよりはいざつらからむ思い知るやと

(大体人間の気持ちなんて昔からならはしもの、といわれるように習慣一つでどうとでもなるものです。あなたのやり方があんまりだったから私、自分の心をそれにならわしてこんなに冷たくしたものです。そして、今度は私の心であなたを訓練させ、あなたがどんなにひどかったかをしらせたかったのですよ)

679 己が身の己が心になはぬを思はば物を思ひ知りなむ

685 身の憂さを知るべき限り知りぬるを猶歎かるることやなにごと

以上の歌に見られるように、和泉式部は恋愛する自分のいかなる心理も見逃さず、克明に観察し、それを形象化して行くのです、このような類いの歌は説明的であります、詠歌態度は現代の心にも通ずるようなものだと思われま。自我の省察や存在としての不安を詠んでいることが現代詩の特徴だと言うなら、彼女の歌は十分そのような要素を備えていると思います。その度合いが少し強いように思われる次のような独詠歌からもそれは伺えます。この大体人の死を経験してから詠んだ親身論命歌や「我不愛身命」の歌群に集中していますが、その中の幾つかを歌だけ取り上げて見ましょう。

275 潮の間に四方の浦浦もとむれど今は我が身のいふかひもなし

293 惜しと思ふ折やありけむありふればいとかくばかり憂かりける身を

306 限りあれば厭ふまに消えぬ身をいざ大方は思ひ捨ててむ

591 とてもかくかくてもよそに歎く身の果てはいかがはならむとすらむ

続496 はかまなき露をばさらにいひおきてあるにもあらぬ身をいかにせむ

続499 まぼろしにたとへば世はたのまれぬなけれどあればあれどなけれ

ば

以上、和泉式部の数多くの恋愛歌を取り上げて見ましたが、彼女の恋愛歌は歌数が多いだけでなく、内容的にも相当広がりを持っていることが分かります。千年も前に彼女を捕らえた恋愛による喜び・恨み・嘆きなどの感情は現代人の心にもそのまま通じるものです。それは彼女がいかに渾身を尽くして恋愛をし、いかに和歌という形式を通してその恋愛の真実の姿を捕らえようと努力したかを示してくれる証拠とも言えるのでしょう。

## 7

以上、黄真伊と和泉式部の歌を比較しつつその類似点および相違点を見てきました。要約して見ると、次のようになると思います。

第一に、両者は人間が本来有すべき異性に対する恋心を素直に吐露しております。黄真伊の場合、このようなことは妓生という身分であったために可能なことであった。というのは、朝鮮王朝時代は儒教の教えに従って自分の性情を押さえなければならなかったのであったのです。反面、和泉式部の場合は、当時の平安の貴族たちの生活が理性とか宗教や思想によって支配されたのではなく、感情を優位にする情趣生活を絶対的なものにしたから可能なことであったのです。両者は積極的に男の行動を導く大胆な歌も詠んでいますが、この種の歌は、和泉式部の歌が熾烈で真摯であるのに対して、黄真伊の歌は多少遊戯的で余裕があるように感ぜられます。このような相違点は、両者にとって恋愛の持つ意味が違っていたからでしょう。

第二に、自由奔放に恋愛をしているように見える両者でも共に男を待つ辛さを詠んでいます。それぞれ時代や立場は違っても女性の境遇というものは男性優位の社会の中で、自分の自由奔放な気持ちとは関係なく行動範囲が狭く限定されていたからだだと思います。このような現象は東西古今を問わず、すべてのことを男性に依存しなければならない封建社会に共通的に見られることだと思います。

第三に、黄真伊の歌が歌材として、漢詩によく見られる山と（緑）水を用いているのに、和泉式部は豊富な歌材を用いています。たとえば「つつじ・鏡・浪・ほととぎす・青柳」などがそうですが、彼女はそれらを用いて重層的なイメージを喚起させています。題材だけでなく内容の面でも和泉式部の恋愛詩歌の世界は歌数が多いだけ、黄真伊より広がりのある詩世界を見せています。

それは韓国の場合、儒教の思想の影響だと思いますが、恋愛歌を歌う場や土壌が準備されてなかったからだと思います。黄真伊が活躍した朝鮮時代の初期には恋愛歌は全く開拓されていなかった時代だったのです。それに比べて日本の上流階級に属する天皇や貴族や僧侶は直接恋愛歌を詠んだり、また歌合わせとかを主催することもあったのです。和泉式部の恋愛歌は勿論独自の要素も強いのですが、このような場の蓄積によって、得られた歌も多いということは否定できないことだと思います。

第四、和泉式部は実に様々な歌の場を持って、様々な恋愛心を詠んでいます。恋愛に溺れているのではなく、自分の恋愛する心理を克明に追ってそれを「客観的な目」で捕らえています<sup>⑥</sup>。これは和泉式部の恋愛歌の大きな特徴と言えますが、我ら凡人が漠然として持っている恋心や（それは黄真伊歌にも伺えます）その悩みの複雑さをすでに1000年も前に短い詩の形式を通して透明にみせてくれますが、このような点で彼女は日本の詩人だけではなく、universalな詩人であるとも言えるのではないかと思います。

#### 注

- ① 黄真伊歌の訳は尹学準氏（時調、創樹社、1978年4月）の訳を参考にしながら直訳に近く手を入れた。
- ② 김 중오 편저, 옛시조 감상, 정신세계사, 1996. 5. 27
- ③ 小町谷照彦氏が既に「和泉式部日記の贈答歌の達成、『論集和泉式部』297p」で指摘している
- ④ 第五句、楠原本に「たたかふ」となっているが、内閣本と日記によって「うたかう」にあらためた。
- ⑤ 『伊勢物語』110段「思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びよ」  
『源氏物語』葵の巻「ものおもふにあくがるなる魂はさもやあらむ」。
- ⑥ 6章及びこの部分は日本の先学の研究に負うところが多い。

## 討議要旨

福田秀一氏から、黄真伊の詩は個人的な感情を詠んだもの、集団的な感情を詠んだもの、どちらとしてとらえればよいのか、という質問がなされた。発表者は、妓生として遊戯的な歌も存在するようだが、黄真伊は最上級の妓生の階級に属していたことから、自由に個人的な感情を詠むことが多かったのではないかと回答された。

山口博氏から、黄真伊の詩はリズム、メロディーがともなうものであったのか、との質問があった。発表者は、メロディーはあり、楽器については記録がなく分からないが朗詠のようなものではなかったかとされ、黄真伊以前のこの種の資料としては「郷歌」というものがある、と答えられた。さらに「郷歌」はいわば民衆の心を歌った歌謡であるが、黄真伊のものには個人的感情が入ってきているところが特色であると指摘された。